

11月号 秋冬に実施するカンキツの病害虫対策

今年の病害虫の発生状況はいかがでしたか？秋冬期は病害虫の伝染源（増殖源）を除去し、次年度の発生を少なくする重要な時期です。耕種的な対策と薬剤散布を併せて実施しましょう。

○伝染源の除去

今年は8月の降雨量が多く、防除に苦慮されたのではないかと思います。発生した病害の病原菌は枯れ枝や被害枝葉等に残っており、そのままにしておくと、これらが翌年の伝染源となります。

例えば、黒点病菌は枯れ枝や園内に放置されたせん定枝・切り株などで越冬し、好適な温湿度条件（適温 20℃前後）になると、降雨とともに菌が拡散し葉や果実に感染します。枯枝中の菌は約3年間生存し、雨が降るたびに拡散します。かいよう病は枝・葉の病斑が伝染源となり、旬平均気温が10℃を超える3月中旬以降に菌の増殖が始まります。

そのため、これら病害の伝染源である枯れ枝やかいよう病の被害枝葉（写真1、2）、せん定くずを除去し園外へ持ち出すなどの処分を行い、伝染源を除去することが防除の第一歩です。現地では依然として園内に放置されたせん定くず（写真3）を目にすることがありますので、せん定くずの園外への持ち出しを確実に行って下さい。表1は、枯れ枝の除去と薬剤散布の効果を表しています（表1）。ご覧の通り、伝染源の除去により菌密度が減少することで、薬剤の防除効果は向上します。

切り株も黒点病の伝染源となるため、可能な限り除去して下さい。除去が困難な場合には、菌が飛散しないよう切り株に肥料袋などを被せます（写真4）。これらの伝染源が園内にたくさん残っている場合は、生育期間中に薬剤防除を行っても十分な効果が得られません。

近年は、気象条件により適期に防除が行えない状況が増えており、伝染減を減らす対策の重要性が増しています。薬剤防除のみに頼るのではなく、まずは伝染減をなくすことが重要ですので、しっかりと対策を行いましょう。



写真1 かいよう病の被害葉



写真2 かいよう病の被害枝



写真3 放置されたせん定くず



写真4 肥料袋で覆った切り株

表1 枯れ枝の除去によるカンキツ黒点病の被害軽減効果（佐賀果樹試 1999年）

試験区	処理区	枯れ枝除去時期				薬剤散布時期			発病度
		6/25	7/14	8/6	8/26	6/25	7/28	9/3	
	枯れ枝除去4回+薬剤散布	○	○	○	○	○	○	○	9.4
	枯れ枝除去1回+薬剤散布	○	-	-	-	○	○	○	9.7
	枯れ枝除去なし+薬剤散布	-	-	-	-	○	○	○	16.9

試験場所：小城市小城町晴気 現地圃場、品種：岩崎早生9年生、供試薬剤：ジマンダイセン水和剤600倍
 降雨概況：6/25～7/28：降雨量436mm 降雨日数16、7/29～9/3：降雨量408mm 降雨日数18、
 9/4～10/18：降雨量313mm 降雨日数22

○カイガラムシ類およびミカンハダニ対策

近年、カイガラムシ類の発生が問題となっています。さらに、これまでカイガラムシ類への効果が高かったスプラサイド剤の販売が中止され、生育期の防除対応が一段と難しくなることが予想されます。このような状況から、冬期における防除対策の重要度が増しています。

ヤノネカイガラムシ（写真4）やミカンヒメコナカイガラムシ（写真5）等のカイガラムシ類は枝葉や樹皮の割れ目などで、ミカンハダニは葉裏で越冬します。これらの害虫に対して、冬期のマシン油乳剤散布が有効なので、12月中下旬から1月上旬頃までのマシン油乳剤97%の散布をぜひ実施しましょう。ハダニのみを対象とする場合には80倍でもよいですが、両種を対象とする場合は60倍で散布します。散布の際には、様々な方向から散布したり、樹冠内部にノズルを入れたりして、葉裏や樹冠内部など薬液のかかりにくいところにもしっかりとかかるよう散布しましょう。

1月上旬までに散布できなかった場合、それ以降の厳冬期の散布は落葉を助長する可能性があるため、せん定終了後の3月上旬にマシン油乳剤97%を80倍で散布します。

ただし、樹勢が低下している樹へのマシン油乳剤の散布は落葉を助長するなど悪影響があるため控え、生育期の殺虫剤で対応して下さい。

また、カイガラムシ類の寄生の多い枝はせん定時に除去してください。密度が高くなった枝では、カイガラムシ同士が重なり、薬剤がかからない個体がありま

す。寄生部位の剪除により、寄生密度が下がり、薬剤防除の効果が高まることが期待されます。カイガラムシ類は、風通しが悪く、葉が込み合った部分など農薬がかかりにくい部分で増殖するため、農薬がかかりやすいようにせん定することも重要です。



写真4 ヤノネカイガラムシ



写真5 ミカンヒメコナカイガラムシ

○環境改善

黒点病は枯れ枝で越冬するので、枯れ枝の発生を少なくするよう栽培管理を行いましょう。間伐・整枝・せん定を徹底し、園内や樹幹内部への採光・通風を良くするとともに、基準に従った施肥管理や土づくりを行い樹勢の維持に努めてください。

また、防風樹の手入れを怠り通風が悪くなると、園内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。防風樹は適切な刈り込みを行い、園内の通風を改善しましょう。ヒノキ・スギが防風樹の場合は、果樹カメムシ類の増殖源となる毬果が結実しないように刈り込みます。

秋冬期の対策の有無が春先からの病虫害の発生に大きく影響しますので、次年度の病虫害の発生を少なくするために、しっかりと病虫害対策を行いましょう。